（３）②様式第３号－２（報告書）

NITS・教職大学院等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 国立大学法人福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科
	事業名：【NITS・連合教職大学院（奈良女子大学）コラボ研修】 「遊び」のワークショップを通して「共創力」を高める参加者主体の協働探究型研修
	研修等名： 「遊び」のワークショップを通して「共創力」を高める参加者主体の協働探究型研修
	開催日時：令和５年７月 28 日　14 時～17 時 開催場所：奈良女子大学附属幼稚園（奈良県奈良市学園北１－16－14） 参加人数（総数）と参加者の属性：（66 人）幼児教育教員 36 人、小・中・高教員 15 人、学生５人、教育行政３人、保護者７人

内容：

「新たな教師の学びの姿」を実現するために、教師の研修観の転換が求められている。そのためには参加者主体の研修が必要ではないか。このような課題意識で、連合教職大学院（奈良女子大学）は、学校種を超えた、参加者主体の協働探究型研修を研究開発してきた。本申請事業では、環境を通し自らが行為主体として学びを創り出す幼児教育の知見に基づき、附属幼稚園を活用し、「遊び」のもつ力を土台に据えた研修設計とした。附属幼稚園に身をおいた参加者が行為主体として「遊ぶ」ことにより学びを創り出すことに挑んだ。

本研修では、「令和の日本型学校教育」を実現する鍵の一つである「共創力」に働きかけていき、協働的に磨き上げていくことで、各学校園の教育実践の質的向上を図ることを目指した。教育現場は個業化が進み、それ故に子どもも含め同僚や地域など他者と協働することが難しい現実を抱えている。教師同様、ゆかりのない土地で子育てをしているとされる多くの保護者は孤立感を抱えやすいといった指摘もある。こうした教師教育の、また社会的な課題を解決するためには、保護者も巻き込みながら、各自の中にある「共創力」を呼び覚まし磨き上げていく研修が必要だと考えた。

この目的を実現するために、附属幼稚園を活用して「遊び」のワークショップを行った。「遊び」はモノ、人、空間、時間の環境要因の中で起こる相互作用によって即興的に生み出される。その場に会する人のそれぞれの思いや考えが重なり合いながら形を変えていくことで新たな発見や視点が生まれていく。「遊び」には「共創」の過程がある。出会った人と遊びを創り出す過程を共に体験することにより、自らの「共創力」に目を向け実践的に捉えてもらおうと考えた。具体的には、３つの Session（「遊び」のワークショップと２つの省察と対話）で研修会を構成した。参加者は、幼児教育教員を加えた１組 6～7 名からなる 11 のグループに分かれて「遊び」、省察と対話を通して「共創力」を捉えることに挑んでいった。

アイスブレイクでは、同グループの関係性をほぐしていくことを目指した。永田卓裕氏（福井県立武生高等学校教諭）がモデレーターを務めた。はじめに参加者とやりとりをすることで、多様な人が集まりそれぞれの見方や考え方が重なり合っていく中で一人ひとりの学びが創られていくことを示していただいた。さらに各自の「共創」の捉えを引き出してくださり、それをもとに各グループで自己紹介を行うことで、これからともに学びを創っていく関係性が形成されていった。

Session1 は「遊び」のワークショップである。保育室という環境に身をおき、その場でモノに出会い、人に出会い、時間の中で「遊び」を創っていった。その場での「遊び」が引き出されていくことを意図し、人的な環境構成として各グループに幼児教育教員を配置した。巡回ファシリテーターとして参加いただいた、伊藤仁美氏（森田さくらこども園園長）、伊藤康弘氏（さくら認定こども園園長）、小林直実氏（千葉大学教育学部附属幼稚園副園長）、草場勇介氏（金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園教諭）、佐藤みちる氏（宮城教育大学附属幼稚園教諭）、辻岡美希氏（奈良女子大学附属幼稚園教諭）、宍戸佳央理氏（奈良女子大学附属幼稚園教諭）、岡田恵太氏（岡山大学教育学部附属幼稚園教諭）、西川くるみ氏（カリタス幼稚園教諭）、町田美穂氏（信州大学教育学部附属幼稚園教諭）、嵩谷浩太郎氏（福井市和田こども園園長）らに各グループに加わっていただき、「遊び」を支えていこうとするふるまいによってモノや人との多様な相互作用が生み出され、様々な遊びの展開が引き出されていった。

Session2 は「遊び」をめぐる省察と対話である。グループで「遊び」の展開をふりかえり、「共創」を捉えていった。①遊びの中で面白さを感じたところ、葛藤を感じたところ、②「共創」を感じたとすれば、それは遊びのどのような瞬間か、③「共創」を感じえなかったとしたらそれはなぜかの３点について省察と対話を行った。先述の伊藤両氏、小林氏、草場氏、佐藤氏、辻岡氏、宍戸氏、嵩谷氏に加え、他 3 名を各グループに配置することにより、対話が円滑にすすむ雰囲気を創り出していった。そのことによって、学びの場になっていくことが感じられた。Session2 を終え、改めて自分自身の「共創」の捉えを言語化する時間を設けることで、自らの「共創」への理解の深まりを感

じることになった。
　Session3 は「共創力」をめぐる省察と対話である。新たなグループで「共創」の概念化を図ることで、「共創」への理解を深めていった。グループを再編することにより、自身が経験した「遊び」における意味を紡ぎ直しながら対話が進められていった。その中で「共創」の捉えを各グループで一枚の画用紙に表現してもらった。鎌内（奈良女子大学教育システム研究開発センター員）がモデレーターを務め、グループごとに提示をしながら全員で共有していった。
　後日、事後アンケートを実施し、その結果を参加者と共有した。

成果：

　Google フォームを用いて事後アンケートを実施し、量的・質的評価を行った。
　量的な評価として、「たいへんよかった」が 94%、「よかった」が 4%となり、95%以上の高い評価が得られた（回答率 80.3%）。質的な評価としては、本研修で学び取ったことと、「共創」についての自らの捉えを記述してもらった。以下、記述を抜粋したものである。「共創という言葉をもとに、様々な業種の方と語り、活動ができたことで、自身の視野が広がった」「共通体験とイメージの共有が作用するとこうなるのかと、子どもたちに起こる気付きの瞬間を追体験したように感じた」「大人同士で遊ぶことを通していろいろなひとの立場で『遊ぶ』を感じ考えることができた。保護者、仲間、子どもとして様々な感情があった」「夢中になれる遊びの場が設定されていたことで、学びが成立した」「まさに共創力が呼び覚まされた」「考えさせられる自分に出会えた」「幼児教育の先生方は共創を子ども達と一緒にと捉え、高校教員は大人同士でと捉えることに驚いた」「自己を見つめた」「学びの原初的な形を体験できた」「イノベーションの前にコンフリクトがあるように、共創の前に葛藤があるのだと体験できた」などであった。
　これらの結果をふまえ、教員研修としての成果として考えられるのは以下の 3 点である。
（１）「遊ぶ」行為は、身体性を伴う。また他者との関係性において多様な情動の揺れ動きを引き起こす。このことが、自らの様々な経験との重なり合いを想起させ「共創」の理解を深めることにつながった。また参加者の実践的課題に即した学びを創り出すことにもつながった。
（２）「遊び」の痕跡（そこで創り出したモノ）が残ることは、自らの思考の過程を振り返る手立てとなる。痕跡が残る「遊び」であったことが、遊びの過程における自らの行為の意味を捉えていくことを促した。「共創」の理解を深めることはもとより、無自覚であった自らの見方、考え方と向き合うことにつながった。
（３）異質で多様な参加者が、「遊び」の過程において捉えた意味を対話により生成していったことによって、立場を超えた学び合いや、互いを尊重しともに学び合うことを実践的に経験する場となった。このことによって参加者が協働探究の具体的イメージを捉えていくことにつながった。

アイディアや工夫したこと：

（１）遊ぶこと、遊びの中の学びの意味づけ、「共創」の概念化に挑むことを通して、一貫して参加者の「共創力」を引き出すことを意図した。身体活動、リフレクション、対話の 3 つの場面を組み合わせることで、参加者の理解を深めていこうと試みた。
（２）自身の学びを自覚していくことで、自己省察を促せるよう個人の学びを意味づける場面を設けた。
（３）多様な「遊び」を引き出せるように、保育室ごとに異なる教材を用意するとともに、その教材性を存分に引き出せるよう環境構成を行った。また、参加者の情動に働きかけ身体活動を引き出しやすくするよう、一つの素材を大量に用意した。
（４）様々な「遊び」の創出過程が引き出されるように、各グループの構成員の属性を多様にした。さらに幼児教育の知見を幼児教育教員の参加者自らが活用していくことを意図し、各グループに幼児教育教員を、必ず複数名加えることにした。

＜写真・図など＞

① アイスブレイク

② Session1

③ Session1

④ Session1

⑤ Session1

⑥ Session2

⑦ Session2

⑧ Session3

⑨ Session3